

本論文の目的は、高齢者の下部尿路症状の実態や支援の現状について概観したのち、高齢化率の高い中山間地域で生活を営む高齢者の下部尿路症状の実態、夜間頻尿にともなう生活への影響と夜間頻尿に関連する要因を明らかにし、中山間地域において、下部尿路症状のある高齢者に対する看護への示唆を得ることである。序章では、本研究の全体像を述べ、第Ⅰ章においては、国内外の文献レビューを通して、比較的自立して生活を営む高齢者の下部尿路症状の実態や支援の現状について論説した。その結果、以下の3点にまとめられた。第1に、高齢者における下部尿路症状は、女性を中心に尿失禁に焦点をあてて調査されたものが大半であり、生活の質への影響のある夜間頻尿についての報告がみられた。第2に、国内において、高齢者の下部尿路症状の生活への影響の実態、および高齢者自身の下部尿路症状にともなう生活上の困りごとの認識は、詳細な部分まで明確になっていなかった。第3に、高齢者の下部尿路症状に対する支援は少なく、尿失禁の改善を期待した運動プログラムやそれを継続していくためのものであった。

第Ⅱ章においては、中山間地域における高齢者の抱える下部尿路症状の実態、下部尿路症状と主観的健康観との関連、および排尿の気がかりと受診行動を明らかにすることを目的とした。泌尿器科などの専門科への受診手段が充足しているとはいえない中山間部のA町に焦点をあて、自記式質問紙調査を実施した。解析対象者は786人（男性339人、女性447人）であった。日中頻尿のある高齢者は約50%、夜間頻尿のある高齢者は約90%であった。中山間地域で生活を営む高齢者は、それぞれの下部尿路症状があることで、自身の健康について良くないと認識していた。また、高齢者の大半は下部尿路症状を複数あわせもっており、男性においては6つ、女性においては4つの下部尿路症状をあわせもっている人が最も多かった。一方、全く下部尿路症状のない人は、3%にも満たなかった。さらに、中山間地域の高齢者は先行研究同様に、排尿の気がかりを感じていても、医療機関を受診するという対処をとっている人ばかりではなかった。特に、大半の高齢者が経験している夜間頻尿は慢性的な睡眠への影響、次の日の活動への意欲、活動参加そのものへの影響が考えられた。夜間頻尿をはじめ下部尿路症状があることで気がかりを感じている高齢者が、医療機関の受診につながる支援が必要である。

第Ⅲ章においては、下部尿路症状の中でも多くの高齢者が抱えていた夜間頻尿に注目し、高齢者の夜間頻尿にともなう生活への影響と複数回の夜間頻尿に関連する要因について明らかにすることを目的とした。解析対象者は699人（男性314人、女性385人）であった。夜間頻尿1回群（男性113人、女性187人）に比べ2回以上群（男性201人、女性198人）は、夜間頻尿のあることで生活に影響を感じている人が有意に多かった。また、複数回の夜間頻尿に関連する要因は、男性が「年齢」「糖尿病」「腰痛症」「日中頻尿」「尿意切迫感」、女性が「年齢」「要支援1～要介護2」「尿意切迫感」「残尿感」であった。男性に対しては、糖尿病や腰痛症といった疾病の治療を軽症な時から、また、女性に対しては、要介護度の低い時、あるいはそれよりも前の段階において悪化しないようにしていくことで、夜間頻尿の悪化の予防につながると考えられる。

総括では、第Ⅰ章から第Ⅲ章までの結果をふまえ、中山間地域における下部尿路症状のある高齢者に対する看護について検討した。第1に、保健と医療の専門職の連携がとれている対象地域の特徴を踏まえ、介護予防事業や健康診査、外来受診の際に、保健師や看護師による問診において主要下部尿路症状スコアなどのツールを用いることがある。このツールを用いることで、下部尿路症状という羞恥心をともなう内容について高齢者が専門職へ相談しやすくなり、夜間頻尿を含めた下部尿路症状で生活に支障をきたしている高齢者が特定され、治療や生活指導といった介入につながるきっかけとなり得る。第2に、A町の高齢者において、今回の調査の結果を踏まえた下部尿路症状についての情報をパンフレットの形として提供することがある。情報を伝えることで、これまで「歳だから仕方がない」、「相談するような内容ではない」という認識でいた高齢者が身近な他者や看護職など専門職に相談するきっかけとなる。